

2002年度卒業論文要旨

ミコノインターナショナルの活動から考える国際協力  
——「脱開発」論再考——

安藤 素子

国際協力への関心が世界的に高まっているが、従来型の政府主体の国家間援助に加えて、地元根づいたNGO活動が注目を集めている。その一事例として、ケニア共和国ガリッサ県に展開する日本のNGO、ミコノインターナショナルの活動を調査した。本論文の目的は、活動地の地域像を背景に、国際協力活動を具体的側面からとらえ、何が見えてくるのかを探るとともに、「脱開発」論の視点を検討することである。

筆者は、同NGOの現地活動に2001年3月末から約6ヶ月間参加させて頂いた。現地では、主に家事全般や英和文翻訳などの内業を手伝いながら、プロジェクト現場を見学したり、ピアニカの指導に孤児院を訪れた。本論文は、これらの体験や聞き取り、収集資料に加え、帰国後の元NGOスタッフへの聞き取りをもとに作成した。

筆者が現地で実際に見てきた主な活動は、建築(診療所建設)・保健医療(医療巡回)・教育分野(奨学金支援)の3分野である。建築分野においては、活動拠点地から南方約200キロに位置するイジャラ地区の診療所建設を視察した。同NGO設立当初から活動の中心である建築分野において、民族的統一性の無さから生じる建築活動の難しさや政府への医療施設引渡し後の運営問題

などの現状をまとめた。保健医療分野では、1997～8年にかけてエルニーニョ現象の影響により洪水被害を受けた当地域に対し、支援が開始された医療巡回を取り上げた。医療巡回の経緯や具体的内容とその意義、また筆者が巡回地で感じた住民の様子などを述べる。教育分野においては、奨学金支援の仲介役を担う同NGOの活動意義を考察し、当地域の国内における教育水準の低さや、男性優位にあるイスラム社会という背景を挙げた。

これらの活動からみえる現状と課題をまとめるとともに、現在の国際協力に対する視点のひとつとして「脱開発」の視点を取り上げた。「脱開発」論の中から、伝統に従って生きる脱経済社会・あらゆる援助の批判・経済的發展を目指す国際援助の危険性という3者の主張を、同NGO活動の上述3分野からそれぞれ検討し、活動の意義を考察した。結論として、国家や民族的背景が生む課題自体には働きかけないことで、根本的課題の解消には直接繋がらないかもしれないが、国や民族という大きなレベルを飛び越えて、今、目の前にいるその人に直接プラスとなる支援を提供するというNGO活動は、現実に即した、確実な支援であると筆者は考えた。

照射される大久保——フィールドワーク試論——

飯田 真実子

大久保はエスニックタウンとして広く知られるようになっていく。そうした変化の裏では、人々のどのような活動がどのように繰り広げられているのか。本論文は、大久保の都市景観の変化をより詳しく探ることに加え、大久保を舞台に活動している様々な団体や個人といった主体に焦点を当てた。その活動への参与観察と聞き取り調査から、そこで活動する人々の街に対する関わり方、活動する人々相互の関わりを観察した。

大久保には、個人住宅・アパート・マンション、

商店、専門学校・日本語学校、ラブホテル、旅館、エスニック・ビジネスを営む店舗が混在している。多数のエスニック・ビジネスが、商店街においてもビル内部においても営まれている。その街の景観の変遷を追うために、住宅地図を用い、大久保地区の一部を抜粋し、建築物、又はビルの内部店舗などの変遷を調べた。大久保では、歌舞伎町の影響、外国人居住者の増加、エスニック・ビジネスの増大などの影響を受けて、個人宅・アパート・マンション、商店、学校、ラブホテル、エス

ニック・ビジネスが段階的に入れ替わり、モザイク状に混在する現在の街並みが形成されていった。住宅地図分析によって、それら都市景観の変遷の様相を見ることができた。

後半では、筆者自身のフィールドノーツを提示した。これらは、大久保の街で様々な人との出会いを通じて体験したものである。この方法を用いる事によって、よりリアリティを持って本研究の

大久保という舞台で繰り広げられる活動とその内容を記述できると考え、そのまま取り上げることとした。大久保では、活動する主体によって、多様な捉え方で様々な見方がされ、そして、その見方に基づいた活動がされていた。大久保という街で、様々な「表情」を持つ主体が、協働したり相克したりしながら、活動していた。

## カンボディアにおける教育協力活動の実態と課題 ——識字教育を中心として——

生野 知子

開発においては、対象国の国民自身が国の発展や自分たちの生活の向上を目指して、主体的に行動することが必要である。そのために最も重要なことの1つは、その国の未来を担う人材を育成する教育であると筆者は考えている。本論文ではそのなかでも最低限必要な能力を養成すべき識字教育に着目した。

東南アジアで識字率の低さが問題視されている国の1つがカンボディアである。それは不幸な内戦の歴史と深い関係がある。同国は世界で有数の被援助国となっているが、実際にどのような活動が行われているのか、教育分野と識字教育について現状を把握し、歴史と地域性から問題点を明らかにすることが本論文の目的である。研究方法としては文献調査に加えて、教育協力活動における4つの立場の異なる団体を対象に、現地でのフィールドワークと日本での聞き取り調査を行った。

カンボディアが内戦で失ったものは、多くの知識人、書物や建造物、また人々が伝えてきた文化にわたる。そして内戦後の人材不足が教師の質の低下という問題になっている。校舎や教材、文房具の数量も不十分である。教育の質が改善されな

ければ、人々の教育への関心は高まらない。しかし、身につく教育を受けられるのであれば、多くの入学希望者が集まるということが、教師の給料をサポートするNGOの支援によって授業を毎日行う学校の例から分かった。新たな非識字者を生まないためには、まず小学校の就学率・進学率を改善しなければならない。絵本の読み聞かせを行うNGOの活動からも、識字教育や絵本が普及すれば就学率の向上も期待できることが確認できた。

人々の心に大きな傷を遺した内戦は今もなお、地雷事故などで人々に新たな傷を負わせている。その一端をカンボディアのフィールドワークでは肌で感じた。地雷をさける教育やHIV/AIDSの予防教育など、危険から身を守るための教育がカンボディアでは必要とされている。そういった事情を汲み取るために、地域に根ざしたNGO活動と、資金と大きな単位で事業の行うことのできる国際機関や政府機関との相互補完的な協力が今後一層期待される。地域に根ざした活動とは、ローカル・スタッフ、現場で関わる人、地域住民の間の綿密なコミュニケーションの上に成り立つ活動である。

## グローバル化する東京の外国人観光客 ——FIT (foreign independent tour) の受け入れをめぐる——

岩崎 雅子

今日の世界ではグローバル化が進行し、物や人の移動が促進され、その中で旅行という形態の人の移動も変化している。空間と時間の短縮

によって目的地も遠距離化し、旅行形態もパッケージツアーだけではなく個人旅行も多くなった。